テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ(PATCH2.2)　メインクエスト

メインクエスト　その２

新たな開拓者　～　混沌の渦動

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

新たな開拓者

アルフィノ ： ドマ難民の多くが長旅で疲弊している。ひとまずウルダハで休息してもらい、体力が回復した者から、
順次、レヴナンツトールへ移送を開始するつもりだ。
移送時には、冒険者ギルドから、腕利きの冒険者たちが護衛に当たることになっている。心配はいらないよ。
だが、本格的な移送の開始に先駆け、君には、先に「レヴナンツトール」に向かってもらいたい。
ユウギリ殿たち代表者の案内役としてね。
冒険者ギルド本部には、話をとおしてある。現地に到着したら、まずは「スラフボーン」を訪ね、
ユウギリ殿を紹介してあげてくれたまえ。

アルフィノ ： ひとまず、ドマの方々の第一陣の受け入れは完了した。しかし、まだベスパーベイやウルダハで待つ人も多い。
彼らの受け入れを円滑に導くのが、目下の使命さ。
それに、ドマを脱出した船は、ユウギリたちの一隻ではないという。今後も、別の難民船が到着する可能性もあるだろうね。

ユウギリ ： レヴナンツトールは、これから拓かれていく地だという。祖国を失った我々にとっては、願ってもない土地だ。

キキョウ ： ようやく落ち着けると思ったのですが、また移動……。ユウギリ様のお身体が心配です……。

カササギ ： レヴナンツトールの周辺には、危険な魔物が多いと聞く。子どもたちがやっていけるのか、我が目で確かめるしかあるまい。

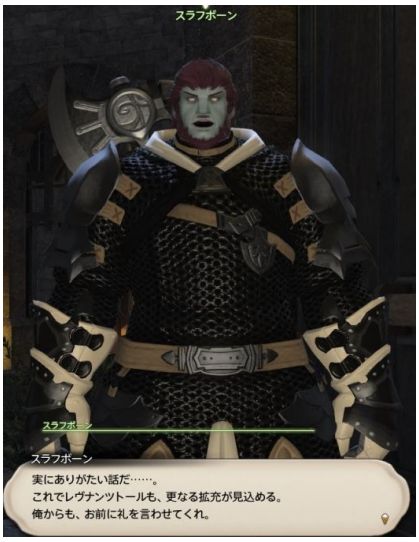
スラフボーン ： 東方風の装束……もしや、お前がユウギリだな？　冒険者ギルド本部から連絡は受けているぞ。
ようこそ、レヴナンツトールへ。遠路はるばる、よく来てくれたな！
ずいぶんと苦労したと聞くが、どうか安心してほしい。ともに働こうという者であれば、一切出自は問わん。
仲良くやっていこうじゃないか。

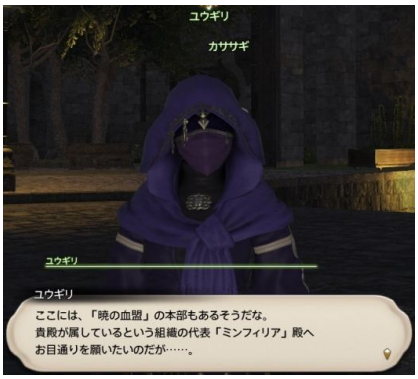
ユウギリ ： さよう、我が名はユウギリ。すでに事情は聞き及んでいるようだが、ドマの民だ。
我々を受け入れてくださり、感謝の言葉もない。

スラフボーン ： なに、世話になるのはお互い様だ。さぁさぁ、頭を上げてくれ。俺たちは同じ「レヴナンツトール開拓団」の一員なんだから。

ユウギリ ： スラフボーン殿……ありがとう。我らドマの民は、誠心誠意、このレヴナンツトールのために尽力することを誓おう。

スラフボーン ： いろいろと動いてくれたようだな。感謝するぞ、冒険者！
カヌ・エ・センナ様の使者が来たぞ。なんでも、お前たちの活躍のおかげで、グリダニアから支援を受けられるそうじゃないか。
実にありがたい話だ……。これでレヴナンツトールも、更なる拡充が見込める。俺からも、お前に礼を言わせてくれ。

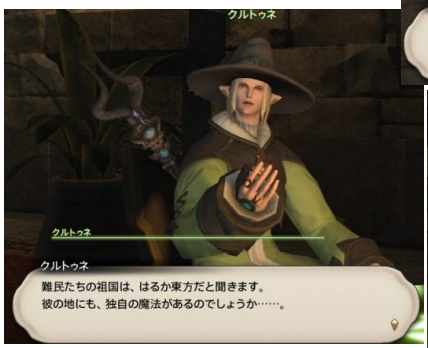


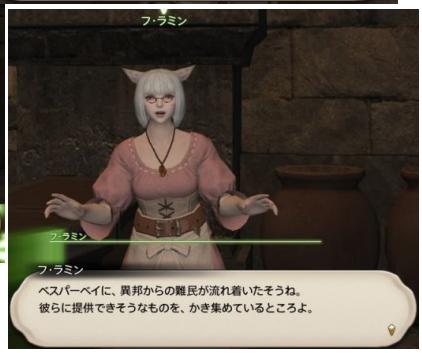


ユウギリ ： ここには、「暁の血盟」の本部もあるそうだな。貴殿が属しているという組織の代表「ミンフィリア」殿へ
お目通りを願いたいのだが……。
あなたや、アルフィノ殿……　「暁」の支援のおかげで、ここまで来ることができた。どうしても直接、謝意を伝えたいのだ。

キキョウ ： 「レヴナンツトール開拓団」……　この地を、良くするも悪くするも、私たち次第ということですね。

カササギ ： やはりレヴナンツトールの周辺は、かなり危険な魔物が多かった。子どもたちを守るためにも、鍛えねばならぬだろう。





クルトゥネ ： 難民たちの祖国は、はるか東方だと聞きます。彼の地にも、独自の魔法があるのでしょうか……。

パパリモ ： ドマがある東州オサード大陸は、エオルゼアとは、ずいぶん異なる文化を持っているね。
当然、戦い方だって異なるだろう。

イダ ： 難民船は、ボロボロの状態だったみたい。沈まずにエオルゼアにたどり着けて良かった……。

ホーリー・ボルダー ： なんのこれしき！　日ごろの特訓を思えば、この程度の箱で、重みなどは感じません！

フ・ラミン ： ベスパーベイに、異邦からの難民が流れ着いたそうね。彼らに提供できそうなものを、かき集めているところよ。

タタル ： 東方でも紅茶は飲むのでっすか？　皆さんが喜ぶおもてなしを考えないとでっす。

ミンフィリア ： やっぱり、ダメね……。
あれから、バルデシオン委員会と連絡がつかないの……。本部はともかく、友人と連絡が取れないことなんて
これまでなかったのに……。
……ウリエンジェさんが、シャーレアン本国を通じて動いてくれているわ。今は、その報告を待つしかないわね……。
それはそうと、ドマの方々のために、いろいろと動いてくれたみたいね。
アルフィノから報告は聞いています、ご苦労さま。
わたしたち「暁」も、彼らのために何かできないかと考え、各グランドカンパニーからの支援金の一部を、
寄付することにしました。
蛮神、蛮族に立ち向かう特殊な組織ですもの……。簡単に働き口を用意することはできないけれど、
せめて、彼らの生活を補助できればと思ってね。
あら、代表の方がわたしに挨拶を？　……ええ、喜んで。
……そう、それはよかったわ。こちらこそ、これから、よろしくお願いします。

ユウギリ ： 我々は、ドマから逃れた者の一部に過ぎない。……この先、しばらくは流入が続くだろう。
それに、このエオルゼアに安住の地ができれば、散り散りになった同胞たちを、呼び寄せたいとも思っている。

ミンフィリア ： その話は、アルフィノから聞いています。わたしたちも、可能な限り協力するわ。
……彼らも人手が増えて、喜んでくれるはずよ。

ギルド本部の使者 ： それでは、私たちは失礼する。受け入れの手続きのために、冒険者ギルド本部に戻らなくてはならないのでね。
ミンフィリア殿、世話になった。あとのことは、スラフボーンに任せてある。
これからも、レヴナンツトールのために協同していこう。

フ・ラミンとアリス

ミンフィリア ： アルフィノから連絡があったわ。もうじき、ドマ難民の第一陣が、こちらに到着するそうよ。
長い船旅に、異郷での大移動……　心労とあいまって、さぞや皆さんお疲れでしょう。
ラミンと「セブンスヘブン」が、ドマの方々のために、食事を用意しています。「フ・ラミン」に声をかけて、
あなたも手伝ってあげてくれないかしら？

ユウギリ ： 帝国内の情報について、我々が掴んでいる事実は、すべてお伝えしよう。ガレマール帝国は共通の敵でもあるのだから。

キキョウ ： ミンフィリア殿が、私たちに理解ある方で安心しました。これで、ユウギリ様の心労が軽減されるといいのですが……。

カササギ ： 冒険者ギルドの方々といい、ミンフィリア殿といい、見ず知らずの我々に、手を差し伸べてくださるとは……。

サンクレッド ： 控え目でありながら、芯の強さも持ち合わせている……。東方の女性というのも、魅力的だな……。
……っと、なんだお前か。何か用かい？

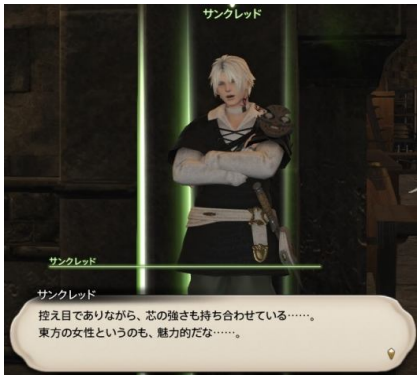
パパリモ ： ふむ……クラフターの心得のある冒険者を募って、必要なものを製作したほうが早いかもしれないな。

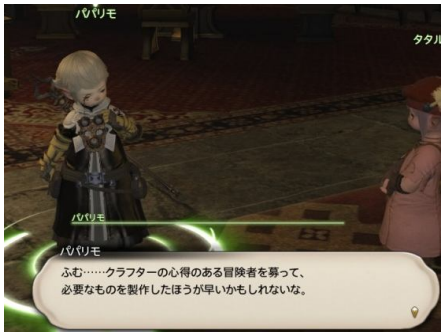
タタル ： 「暁」からも物資を提供したいのはやまやまでっすが、こちらも移転したばかりで、備蓄が少ないのでっす。

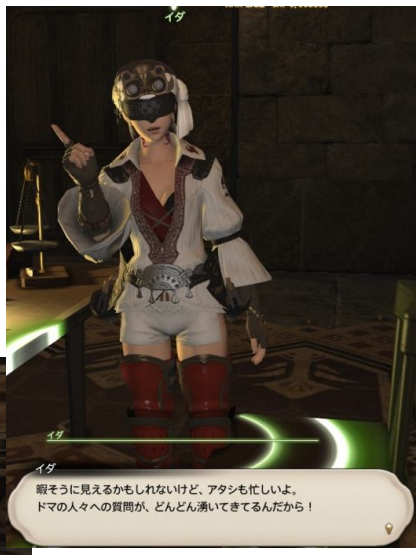
イダ ： 暇そうに見えるかもしれないけど、アタシも忙しいよ。ドマの人々への質問が、どんどん湧いてきてるんだから！

クルトゥネ ： パパリモさんたちも、難民の対応で忙しそうです。東方独自の魔法について聞き出してほしいものですが、
皆さんに、そんな余裕はなさそうです……。

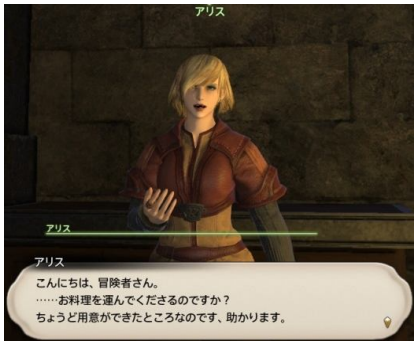
ホーリー・ボルダー ： 人が増えるということは、いざこざも増えるということだ。有事に備えて、体力作りに励んでおこう。







フ・ラミン ： あら、◇◇◇さん。……お食事の準備を手伝ってくれるの？　助かるわ！
では、飲み物を届けてもらっていいかしら？
お料理は、外の酒場「セブンスヘブン」を切り盛りする「アリス」が、腕によりをかけて準備しているの。
そうね、彼女のお料理も、運んでもらえると助かるわ。
ここから届けてもらいたいのは、この「ローマニのワイン」よ。全部持ったら、セブンスヘブンの「アリス」に声をかけてね。
届け先は、彼女が知っているわよ。

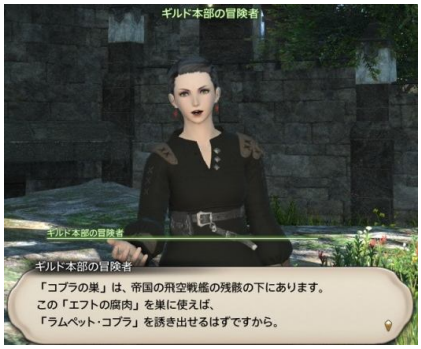


アリス ： こんにちは、冒険者さん。……お料理を運んでくださるのですか？　ちょうど用意ができたところなのです、助かります。
では、このお料理をすべて、「ギルド本部の冒険者」へ届けていただけますか？
彼女がドマの方々のお世話をしているそうだから。

ギルド本部の冒険者 ： ドマ難民の第一陣が、さきほど到着しました。長旅が重なり、皆さん、疲労が限界のようです。
はやく皆さんに食事を配りたいのですが……。
お待ちしていました、ご協力ありがとうございます。ああ、いい香り……私もお腹が空いてきちゃいました。
……私がいただきたいぐらいですよ、いただきませんけど。
長旅で疲れきったドマの皆さんも、この愛情たっぷりの食事を摂れば、力がわきあがることでしょう。
ところで……。この地で、ドマの方々が暮らしていくにあたり、新たな問題が浮上して困っているのです……。

サハギン族の暗躍

ギルド本部の冒険者 ： レイクコブラ……あの醜怪な大蛇をご存知ですね？　最近、「聖コイナク財団の調査地」への道中に、嫌に数が増えてきていまして……。
当地に集う者は、腕利きの冒険者ばかり。これまでは、さほど問題にはならなかったのですが……
子どもや老人がいる、ドマの方々となると話は別です。
この周辺の開拓で悲惨な事故が起きる前に、繁殖したレイクコブラ……「ラムペット・コブラ」を、駆除していただけませんか？
「コブラの巣」は、帝国の飛空戦艦の残骸の下にあります。この「エフトの腐肉」を巣に使えば、
「ラムペット・コブラ」を誘き出せるはずですから。



ギルド本部の冒険者 ： ご苦労さまでした。あなたにレイクコブラを駆除していただいている間に、ドマの皆さんには、食事をとってもらっています。
配膳がてら、少し話を聞いてみましたが、皆さん、疲労の色は濃いものの、希望に満ちていました。
私たちと良い関係が築けるといいのですが……。
そういえば、「ミンフィリア」さんが探していましたよ。何でも、「消失事件」の調査に進展があったとか……
「石の家」に行ってみてはいかがですか？

キキョウ ： 悲願であった安住の地が、ようやく見つかりました。……ですが、ユウギリ様のことです。次の動きを視野に入れ始めたことでしょう。

カササギ ： 郷土を守るため戦い続けてきたエオルゼアは、帝国支配下の属州で暮らす者にとっては希望なのです。
だからこそ、我々はこの地を目指して来たのですよ。

フ・ラミン ： ドマの皆さん……さぞや辛い逃避行だったでしょう。皆さんの気持ちが少しでも和らぐよう、歓迎の準備を進めましょう。

イダ ： ヤ・シュトラが戻ったら、レヴナンツトールに人が増えてて、ビックリするだろうね！

パパリモ ： 仲間が増えるのは歓迎だけど、その分、不穏分子が紛れ込みやすくなるだろう。警戒を強めた方がいいかもしれないね。

タタル ： ドマの方々を統括するのは、冒険者ギルドでっす。「暁」にも、人員の情報を知らせていただけるよう、頼んでみるでっす！

サンクレッド ： リムサ・ロミンサに向かったヤ・シュトラの調査は、どうなっているだろうか……。

ユウギリ ： エオルゼアも、ガレマール帝国の侵攻を防いだとはいえ、部族間の抗争など、多くの問題を抱えているようだな……。

サンクレッド ： どうだ、足取りはつかめたか？

ヤ・シュトラ ： ええ、思ったとおり。犯人は海賊団「海蛇の舌」の連中ね。

サンクレッド ： ……やはりそうか。

ヤ・シュトラ ： こっちに何か動きはあった？

サンクレッド ： いや、静かなものさ。アマルジャ族は、時折「イフリート」を召喚しているが、溜め込んでいたクリスタルを使っているようだ。
ウリエンジェからも、目立った動きは報告されてない。

ヤ・シュトラ ： ……決まりね。

ミンフィリア ： どういうこと？

ヤ・シュトラ ： ここ最近、頻発していた、ザナラーンのクリスタルの消失……。当初は、アマルジャ族に流れていると思っていたわ。
でも、実際には、流れていた先は海の向こう……　バイルブランド島だった。

ミンフィリア ： ラノシアに……？
確かに、しばらくおとなしかったサハギン族が、ここにきて活発に動いているという情報があるけど……。
……まさか、蛮神「リヴァイアサン」を召喚しようとしているの！？

ヤ・シュトラ ： 残念だけど、そのとおりよ。
先のアマジナ鉱山社の事件を追ううちに、海賊の関連を匂わせる証拠を見つけたの。
そこで、私はリムサ・ロミンサに行って調査をしていた。
「黒渦団」の調査隊に同行した結果……　サハギン族による蛮神「リヴァイアサン」の召喚は、
目前に迫っているとの結論に達したわ。
……そして、やつらは「不滅なる者」という、何かしらの力を手に入れている。

ミンフィリア ： ……クッ。
（超える力）

ヤ・シュトラ ： このエーテルの乱れ……。想像以上ね。
……やはり、神降ろしの準備を。

サハギン族の司祭 ： フスィーッ……。すべての準備は整った！　ワレらが神を招き「ヒレナシ」どもを一掃する！
そして、この力を解き放って「不滅なる者」へと昇華し、あの方と同じ、永遠なる時を手に入れる……！
……ワレらの海を取り戻す時が来たのだ、フスィーッ！！

ヤ・シュトラ ： あの方……？　不滅なる者とはいったい……。
ここまでか……。
（超える力終了）

ミンフィリア ： 不滅なる者……。まさか……。

ヤ・シュトラ ： ふたりとも大丈夫？

ミンフィリア ： ……今、あなたも見たのね！？
不滅なる者、永遠の時……つまりは「不死」の存在……。おそらく、白き衣のアシエン……
「アシエン・エリディブス」が言っていたことよ。
……だとしたら、あのサハギン族は、「超える力」を持っているというの？

ヤ・シュトラ ： メルウィブ提督から、蛮神「リヴァイアサン」召喚の阻止、それに、万が一の事態に備えて、
「暁」の力を借りたいと申し出があったわ。

ミンフィリア ： 蛮神問題となれば、断る理由はありません。リムサ・ロミンサへ向かいましょう。
わたしも行きます。……タタルさん、留守をお願いね。

サンクレッド ： おいおい、本気かミンフィリア。

ミンフィリア ： どうしても、確かめなくてはならないことがあるの。
「答え」があるのかもしれない……。……「超える力」の真なる能力の。

サンクレッド ： しかたない、俺も行こう。もしもの時には、盟主さまは俺が守るさ。

ミンフィリア ： ありがとう、サンクレッド……。

ユウギリ ： ……何か、起きたようだな。

ヤ・シュトラ ： ええ、エオルゼアを脅かしている仇敵……　蛮神が現れようとしているのよ。

ユウギリ ： 蛮神……。

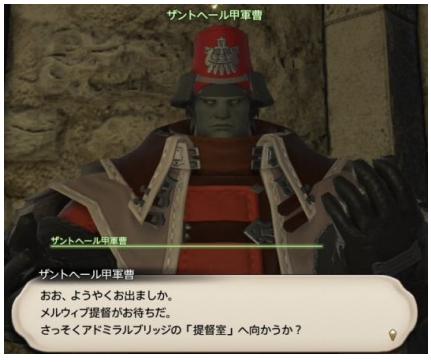
ヤ・シュトラ ： 私たち「暁の血盟」は、その敵を排除するために動いている。この地を救済するためにね。

ユウギリ ： ……ならば、私も力を貸そう。皆には世話になっている……少しでも恩を返したい。幸い、腕には少し自信がある。

ヤ・シュトラ ： それは助かるわ。私たちには、少しでも戦力が必要なの。
それに、あなたにとっても、エオルゼアがかかえる問題を知る、良い機会になるかもしれないわね。

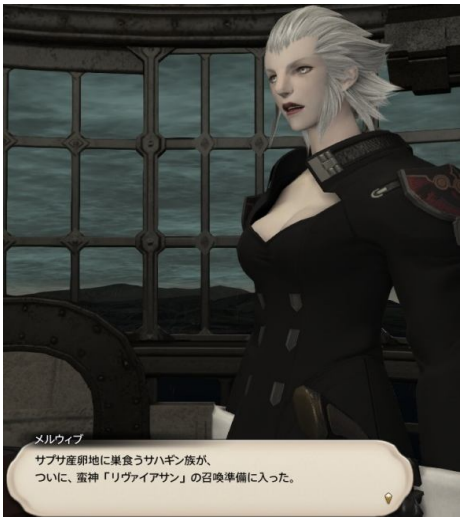
ふたりの盟主

ミンフィリア ： 蛮神「リヴァイアサン」の召喚を阻止するためには、敵をよく知る必要があります。
でも、「リヴァイアサン」については、第七霊災前、かつての海雄旅団によって討伐されたことがある。
……この程度の情報しかないわ。
そして、ヤ・シュトラの話では、召喚は目前……。いずれにせよ、情報を元に作戦を立てている時間はないわね。
まずはリムサ・ロミンサの「メルウィブ提督」を訪ねましょう。
下甲板層のブルワークホールにいる「ザントヘール」さんに申し出れば、提督室へ通してくれるはずよ。



ザントヘール甲軍曹 ： おお、ようやくお出ましか。メルウィブ提督がお待ちだ。さっそくアドミラルブリッジの「提督室」へ向かうか？

メルウィブ ： 来てくれたか。……すでに話は聞いているな？
サプサ産卵地に巣食うサハギン族が、ついに、蛮神「リヴァイアサン」の召喚準備に入った。
召喚に必要なクリスタルを保有していないと見ていたが……　ヤツらめ、配下の海賊団「海蛇の舌」を使って
各地で略奪を繰り返し、集め終えたらしい。
我々黒渦団は、蛮神「リヴァイアサン」の召喚を阻止するため、大規模な作戦を展開する。
君たち「暁」にも、この作戦に同行してもらいたい。
可能な限り、召喚前に阻止したいと思っているが……。もしもの時には、君たちの力を借りることになる。……よろしく頼む。
しかし、盟主自ら前線にでるとは……　あまりに危険ではないのか？



ミンフィリア ： 危険は承知のうえ……。ですが、どうしても確かめたいことがあるのです。わたしの同行も許可していただけますか？

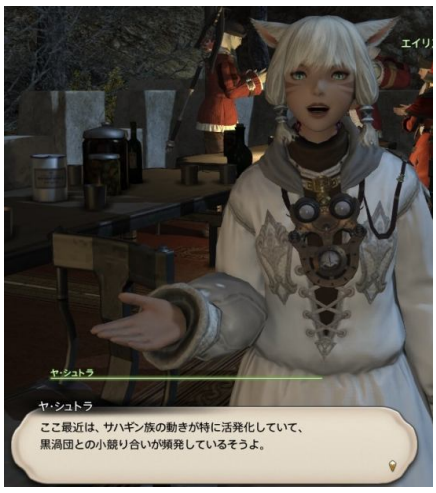
メルウィブ ： こちらは協力を要請している身。覚悟の上なら、断ることなどできないさ。ただし、私と行動を共にしてもらおう。
すでにサプサ産卵地に、偵察隊を派遣してある。ほどなくサハギン族の動向が判るだろう。
まずは、臨時作戦本部を置いたキャンプ・スカルバレーの「ファルクブリダ中甲佐」に状況を確認する。
当地で我々と合流し、偵察隊の報告を受けるのだ。

ミンフィリア ： 「超える力」の真なる能力の「答え」……　見つかるといいのだけれど……。

ファルクブリダ中甲佐 ： おお、待っていたぞ。よくぞ、危険な作戦への協力を受け入れてくれた。兵に代わって、礼を言わせてくれ。
蛮神「リヴァイアサン」の召喚阻止作戦……　無辜の民を守るためにも、必ず成功させよう！

産卵地事変

ファルクブリダ中甲佐 ： ほどなく、サプサ産卵地より、偵察隊が帰還する手はずになっている。それまで、今しばらく待たれよ。
かつて成された、蛮神「リヴァイアサン」討伐は、傭兵団「海雄旅団」によるもの……。
恥ずかしながら、我ら黒渦団が、「リヴァイアサン」に対するのは初めてなのだ……。
ゆえに情報収集は、確実に行っておきたい。
そうだ、偵察隊を支援する作戦に、貴公も協力してもらえないか？



ヤ・シュトラ ： ここ最近は、サハギン族の動きが特に活発化していて、黒渦団との小競り合いが頻発しているそうよ。

ユウギリ ： 敵地となるサプサ産卵地の地形については、黒渦団の方に説明を受け、おおかた把握したところだ。
これで、同行しても荷物になることはなかろう。

サンクレッド ： この辺りは、ずいぶんと様変わりしてしまったもんだ。俺がリムサ・ロミンサにいたころの面影は、かけらもない……。

ウ・ジュガル少甲士 ： 任務、ご苦労さまです！　……えっ、サハギン族対策にご協力いただけるんですか！？　それは、頼もしい限りです。
現在、偵察隊がサプサ産卵地に潜入しています。彼らが動きやすくなるよう、警備の目を引きつけるのが、本陽動作戦の目的です。
サハギン族の哨兵が展開するハーフストーンへと侵入し、最近、奴らが増築している「サハギン族の矢盾」を
この「軍用爆弾」で爆破してください。
派手に破壊活動を行い、警備の目を引きつけるのです。ただし、サハギン族の哨兵に感づかれてしまった場合は、
返り討ちにして時間を稼いでください！

ファルクブリダ中甲佐 ： 陽動作戦は成功したようだな。奴らも、さぞ慌てふためいたことだろう。
あとは、サプサ産卵地に潜入した偵察隊が、無事に戻るのを待つだけだ。

海に散る命

ファルクブリダ中甲佐 ： おかしい……サプサ産卵地に潜入した偵察隊が、予定時刻を過ぎても帰還しない……。まさか、サハギン族に気取られたか……。
彼らは重要な情報を握る身……　早急に捜索隊を送らねばならぬだろう。すまないが、貴公も捜索に協力してもらえんか？
「黒渦団の軍用薬」を渡しておく。負傷者がいた場合は、応急手当をしてくれるとありがたい。
偵察隊の兵は5名だ、頼んだぞ。
ただし、深追いは厳禁。……もしも……死者が確認された場合は、遺体を回収の上、速やかに帰還してくれ。

黒渦団二等甲兵 ： うぅ……誰か……助けてくれ……。サハギン族の戦士にやられた……。「黒渦団の軍用薬」があれば……。
ああ……助かりました、ありがとうございます。……ファルクブリダ中甲佐が、私たちのために捜索隊を？　助かりました。
私たちは、偵察中に「海蛇の舌」の奇襲を受けたのです。ほかの仲間は自分を逃がすため、連中に自ら捕らわれ、
「海蛇の巣穴」へと連れ去られてしまいました……。
急ぎ「海蛇の巣穴」にて仲間を探し、救出を願います。「海蛇の舌」に襲われたら討伐してください！
私はファルクブリダ中甲佐に、応援要請にいきます！
万が一、死者が出るような事態になったら……　ひとまず遺体を回収の上、ファルクブリダ中甲佐のもとに帰還願います。

ファルクブリダ中甲佐 ： ……戻ったか、無事で何よりだ。「海蛇の巣穴」に向かったと聞き、心配していたぞ。それで、ほかの偵察兵の消息は……？
くそっ、なんと無残な……。やり方がむご過ぎるッ！
残りの2名は行方不明のままか……やつめ、許さんぞ！　……ともかく、貴公のおかげでひとりを救うことはできた。
恩にきるぞ、冒険者。
生還した偵察兵の報告を受け、メルウィブ提督が作戦を練っておられる。
すぐにでも、出撃の号令が下ることだろう。貴公も準備が整い次第、私に声をかけてくれ。
……それにしても、サハギン族のやつらめ……。

超える力、不滅なる者

ファルクブリダ中甲佐 ： ……くそっ、サハギン族のやつらめ。仲間の借りはいつか返すぞ……。

メルウィブ ： ……状況は聞いた。偵察隊は、ほぼ壊滅したそうだな……。奴らも、神降ろしに必死と見える。

ファルクブリダ中甲佐 ： しかし、生存者から多少の情報は入手できました。サプサ産卵地最深部の蛮風エーテライトの周辺に
サハギン族やテンパードが集まり始めているようです。

メルウィブ ： いよいよか……。至急、手を打たねばなるまい。

ファルクブリダ中甲佐 ： すでに警戒は厳しくなっており、正面突破では、行く手を阻まれる可能性が高いでしょう。

メルウィブ ： ならば、隊を複数に分け、陽動しつつ潜り込むまで。……目標は、産卵地最深部の蛮風エーテライト。
サハギン族の司祭を討ち、神降ろしを阻止せよ！
黒渦団は、テンパードになった海賊どもを陽動する。奴らの動きを封じるために「海蛇の巣穴」へ向え！
あの辺りは、地形が入り組んでいる。特殊陸戦隊を先行させつつ、各隊を扇状に展開しろ。
同時に、黒渦艦隊が海洋で威嚇を行う。派手にブチかまして、奴らの気を引きつけるんだ。

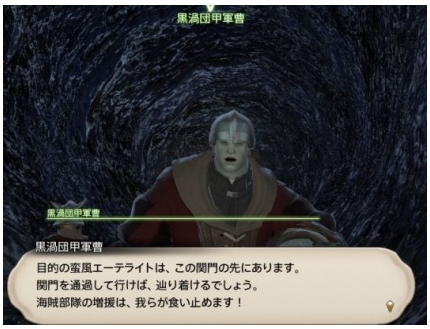
ミンフィリア ： わたしたち「暁の血盟」も隊を分けて、サハギン族を撹乱します。
◇◇◇。あなたは、ヤ・シュトラとともに、蛮神「リヴァイアサン」の召喚阻止に向かって。
メルウィブ提督がおっしゃっていたとおり、周辺で大規模な陽動作戦が展開されます。
サハギン族の警戒が薄くなったところに、少数による侵入を試みます。……いわば、侵入部隊ね。
サンクレッド、それに協力を申し出てくれたユウギリさんは、サプサ産卵地の外にサハギン族を誘導し、侵入部隊の支援を。
適当に巻いたら、彼女らに合流して。

メルウィブ ： 私は、ミンフィリアとともに、ここから全体を指揮する。後ほど、現地へ駆けつけよう。
何としても神降ろしを阻止せよ！　……作戦開始！

ヤ・シュトラ ： フフ……。久しぶりにいっしょに行動するわね。……行くわよ！

ミンフィリア ： 敵地への侵入は、もっとも重要で危険な任務。でも、あなたならやってくれると信じているわ。

黒渦団甲軍曹 ： 目的の蛮風エーテライトは、この関門の先にあります。関門を通過して行けば、辿り着けるでしょう。
海賊部隊の増援は、我らが食い止めます！



ヤ・シュトラ ： 私たちの第一目標は、蛮神「リヴァイアサン」の召喚が行われる、サプサ産卵地の最奥部、蛮風エーテライトへの到達よ。
目的地までには、いくつかの関門がある……。警備は厳重だから、もしも敵兵に発見されたら、
後続部隊のためにも、残らず討伐しておきましょう。
私は、あなたと別のルートを進むわ。目的地で落ち合いましょう。

ヤ・シュトラ ： 助かったわ、ありがとう。サハギン族の兵士に隙をつかれるとは不覚ね。
……ゆっくりしてる暇はないわ、行きましょう！
チッ……民間人に黒渦団のッ！？　誘拐してテンパードにしたのね……。

サンクレッド ： またせたな！
東方の戦闘術ってやつかい？　やるじゃないか。
なら、俺も……。お上品に戦うのはここまでだ！

ユウギリ ： ほう……。

サンクレッド ： 蛮風エーテライトへ！

メルウィブ ： 遅れてすまない！

サンクレッド ： 散々迷惑をかけてきたんだ。たまには、かっこいいところをみせないとな！

サハギン族の司祭 ： フスィーッ……。ワレらから海を奪った「ヒレナシ」どもめ！　性懲りもなく現れおったか！
しかし、その愚行も今日までよ！　貴様ら「ヒレナシ」を撃滅する時がきたのだ！
今再び、ワレらが水神様を招き、その水流により「ヒレナシ」どもを押し流してくれる！　フスィーッ！！
御神よ、ワレらが誓願を届け給え……。
御神よ、ワレらの祈願を叶え給え……。
御神よ、ワレらに慈悲を与え給え……。

メルウィブ ： 何をする気だ！？

ミンフィリア ： この感覚……まさか「超える力」ッ！？

メルウィブ ： なに！？

サハギン族の司祭 ： フスィーッ！！　そうか……これが「超える力」を受け入れるということか！
フスィーッ、これでワレもあの方々と同じ存在に……

メルウィブ ： なんだと！？

サハギン族の司祭 ： フスィーッ、無駄だ！　ワレは「不滅なる者」に昇華した！　もはや止めることはできんぞ「ヒレナシ」ども！
創世の湧水に生まれし、蒼き神よ！　氣現にて穢れた大地を清めんとする、いと高き神よ！
今こそ、ワレの肉体を依代に、一族に救いを！
水神リヴァイアサンよ、来たりませ……！

メルウィブ ： クソッタレ！！

サハギン族の司祭 ： フスィーッ……。無駄だと言っただろう「ヒレナシ」めぇ！

ユウギリ ： こ、これは……。

メルウィブ ： 蛮神「リヴァイアサン」ッ！

サハギン族の司祭 ： フスィーッ……！？　……力が……抜けて……　水神様に……吸われている……？
ワレは……不滅になったのでは……ないのか……？　……白き衣のものよ……これは……いったい！？
……フ……スィーッ……。

ミンフィリア ： ……消えた！？

メルウィブ ： ……艦隊が壊滅したとは、どういうことだ！？　リヴァイアサンがそちらに出現しただと……。
わかった、残存艦を編成して撤退しろ！　……かまわん、餌は海賊どもにくれてやれ！
海洋で陽動作戦にあたっていた黒渦艦隊が、蛮神「リヴァイアサン」に襲われ、大打撃を被ったらしい。
リヴァイアサンは、西ラノシア沖に移動した……。なぜだ……？　なぜ、ここではなく沖に出たのだ……。
まさか……！？　「大海嘯（だいかいしょう）」を起こすつもりか！

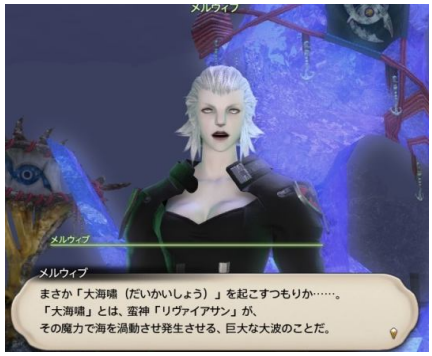
ユウギリ ： エオルゼアの「神」とは、なんという荒々しい存在なのか……。
ガレマール帝国が「神」を目の敵にするのも、頷けるというものだ……。

ヤ・シュトラ ： 相手は水神、海で待ち構えられたら、近づくこともままならない……。……何か方法を模索しなければ。

サンクレッド ： ミンフィリアを守りぬけたのはよかったが、召喚阻止は失敗か……。

ミンフィリア ： 蛮神「リヴァイアサン」の召喚を許してしまうなんて……。急いで対策を考えなくては……。

メルウィブ ： まさか「大海嘯（だいかいしょう）」を起こすつもりか……。「大海嘯」とは、蛮神「リヴァイアサン」が、
その魔力で海を渦動させ発生させる、巨大な大波のことだ。
その威力はすさまじく、一地方の地形すら変えてしまうほど。「大海嘯」の発生だけは、なんとしても阻止せねば……。



リヴァイアサン掃討作戦

メルウィブ ： 事態は、緊急を要す……。だが、こんなときこそ冷静な対処が必要だ。
相手は、はるか洋上……　今の状態では「リヴァイアサン」に近づくことさえ不可能。
一旦、リムサ・ロミンサへ帰還し、態勢を立て直そう。
リムサ・ロミンサに戻ったら、アドミラルブリッジの提督室へ来てくれ。改めて蛮神「リヴァイアサン」掃討作戦を検討しよう。

ザントヘール甲軍曹 ： 蛮神「リヴァイアサン」掃討作戦の検討だな？　メルウィブ提督がお待ちだ。
さっそくアドミラルブリッジの「提督室」へ向かうか？

ユウギリ ： リヴァイアサン……。あのような異形が存在するとは……。この地の「神」は、なんと強大で荒々しいのだ……。

ヤ・シュトラ ： 水を操る蛮神「リヴァイアサン」との戦いが洋上でだなんて……　分が悪いわね……。

サンクレッド ： 俺の短剣さばきはどうだった……？　まあ、昔はいろいろやってたもんでね。

ミンフィリア ： サハギン族の司祭は、自らを「不滅なる者」と称していた。なのに、蛮神「リヴァイアサン」に吸収された……。
いったい、どういうことかしら……。

エインザル大甲将 ： 蛮神ごときに、巨艦「リムサ・ロミンサ」を沈めさせるわけにはいかん……。何としても討伐しなくてはな。

メルウィブ ： 西ラノシアの南北防波壁の先……。あの辺りは、以前「ハーフストーン」と呼ばれ、小さな入植地が存在していた。
……黒渦団が設立される数年前、蛮神「リヴァイアサン」が召喚されたことがあった。その時は「海雄旅団」が討伐に成功したのだが……
霊災直後に再召喚された際には、蛮神の放った「大海嘯」の影響で、その入植地は全滅……。
土は剥ぎ取られ、岩だらけの不毛の土地と化した。

ヤ・シュトラ ： それが、今の「サブサ産卵地」と呼ばれている場所。

メルウィブ ： ……そうだ。サハギン族は地形を作り替え、大規模な産卵地を作ろうとしている。
流入していたクリスタル、テンパードの数からみるに、今回召喚された蛮神「リヴァイアサン」は、
先のものとは比較にならないくらい強力だ。
本格的に力をつけた奴が「大海嘯」を使えば、ハーフストーンのような一地方だけではなく、
リムサ・ロミンサ全体が海に沈められかねない。
なんとしても、蛮神「リヴァイアサン」を討伐しなくてはならないが……。

サンクレッド ： しかし、メルウィブ提督。どう対処します？
海はリヴァイアサンの独壇場だ。第三艦隊の船だって、近づく前に、沈められたというではないですか。

メルウィブ ： 加えて、砲撃も着弾前に撃ち落とされ、効果が無いとの報告も受けている。何か打つ手はないのか……。

ヤ・シュトラ ： 唯一の討伐事例では、入江に誘き寄せて戦ったというわ。……となると、元「海雄旅団」の人たちに話を聞いても、
有益な情報は得られないでしょうね。

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： ……提督。

メルウィブ ： 言ってみろ、エインザル大甲将。

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： 帰還した生存艦からの報告によれば、蛮神「リヴァイアサン」からの攻撃は、水神の名のごとく、
大波……つまり「水」を操ったものだといいます。
ならば、その莫大な水属性の力を、ほかの属性に変換して衝撃を和らげればいい。
「偏属性クリスタル」を用いた属性変換機構、「魔法障壁発動器」を船に乗せて、身を守るって訳ですな。

ミンフィリア ： あなたが蛮神「ガルーダ」の暴風の壁を突破した時と、同じ手法をとるというわけね。
アルフィノからの報告書には目を通したわ。

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： まぁ、古い知人の……　風来坊な巴術士からの入れ知恵だがな。

メルウィブ ： なるほど……。確かに、同じ機構を作るのであれば、シドでなくても、ナルディク＆ヴィメリー社で作ることができるだろう。
ただし、あくまで「対防御」の策であった、蛮神「ガルーダ」の時とは状況が異なる……。今回は「対攻撃」なのだ。
蛮神が大型船を沈めるために繰り出す大波……　それを変換しきるために必要な偏属性クリスタルの量となると、想像を絶するな。
それだけ莫大な量のクリスタルを積んで、まともに航行可能な大型船など、黒渦団にも無いぞ？

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： ……かつて、リムサ・ロミンサで勢力を誇った海賊の「霧髭」は、奪った大量の財宝を運ぶために、
2隻の廃船をつなぎ合わせた「双胴船」を造ったといいます。
残った軍艦を繋いで「双胴船」を再現。大型の属性変換機構を積載すれば、あるいは。

メルウィブ ： 「霧髭」がそんなことを……？　さすがに詳しいな、エインザル大甲将。

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： ゴホン……ともかく、戦艦で急造の「双胴船」を牽引。目標の目前で切り離し、蛮神「リヴァイアサン」にぶつける。
奴に取りつくことさえできれば、勝機はあるはずです。
むろん、発案者であるからには、危険な牽引船の指揮は、自分がとらせてもらいますよ。

メルウィブ ： お前たち……。……そうだな、その作戦しかあるまい。
レイナーか、私だ。モラビー湾に、残った軍艦をかき集めろ。
……そうだ、生きている艦を優先してまわせ。修理はあとにまわしてかまわん。
エインザル・スラフィルシン大甲将、本作戦の指揮をお前に任せる。至急、「双胴船」の製造にかかれ！

エインザル・スラフィルシン大甲将 ： ハッ！

メルウィブ ： リムサ・ロミンサの未来は貴公にかかっている。……頼んだぞ、光の戦士よ。

メルウィブ ： 「双胴船」の艤装は最大限に急がせているが、完成までには、しばしの時を要するだろう。ええい、歯がゆい……。

ユウギリ ： リヴァイアサン……。あのような異形が存在するとは……。
……東方にも「神」はいる。かつて呼び降ろされたとも伝わるが、まさか、この目で見ることになろうとは……。
ガレマール帝国が警戒するのも頷ける……。

メルウィブ ： ……なにごとか。

黒渦団の伝令 ： し、失礼しました！　至急、提督にお伝えする案件がございます！

メルウィブ ： ……何だ。

黒渦団の伝令 ： ハッ……イエロージャケットからの報告によりますと、蛮神「リヴァイアサン」を討伐したと、
自慢げに言い回っている男がいるらしいのです。

メルウィブ ： 蛮神「リヴァイアサン」を……。その者は、元「海雄旅団」なのか？

黒渦団の伝令 ： い、いえ、そこまでは……。現在、別部隊の者を現地に向かわせ、事情聴取をしているところです。

メルウィブ ： どうにも眉唾ものの話だが……。……いや、この状況だ。可能性があるなら当たってみるべきか。
冒険者殿……万が一、その情報が真だった場合、蛮神「リヴァイアサン」討伐の手蔓となるやもしれん。
「双胴船」の艤装には、今しばらく時間を要す。その間、現地の兵に合流し、話を聞いてもらえるだろうか。

黒渦団の伝令 ： その男は、低地ラノシアの「グレイフリート風車群」にいるとのこと。冒険者殿、よろしくお願いいたします！

メルウィブ ： 「グレイフリート風車群」にいるという蛮神「リヴァイアサン」を討伐したという男……。
我らの手蔓となる者だといいのだが……。

トラッハトゥーム ： だーかーらー！　「あの」蛮神討伐の話が聞きたかったら、風車へ荷物を運べって言っただろ？

黒渦団一等甲兵 ： し、しかし先ほどは、オレンジの木を手入れしたら、話を聞かせてくれると……！

トラッハトゥーム ： かーっ、これだからシロウトは！　俺様ってば、仕事を任されすぎて、もう3日も寝てないわけ。
わかる？　3日よ？　3日！
……んもー、そこまで頼まれちゃ仕方ねーなぁ！　どうしても聞きたいってんなら、「あの」蛮神の話を話してやる……ぜ？
アレだろ？　あの強敵、なっつかしーなー！　ふふっ、蛮神「リヴァイアちゃん」……だろっ？
いやー、あいつも強かったわー。タコタ……タイタンを余裕で倒した俺様でも、ちょびっとだけ、冷や汗かいたもんな。
海を操るリヴァイアちゃんの、なんかやべぇ……波！　すげぇ臭くて、その上やべぇ……泡！
でもー？　それを三枚おろしにして食べちゃったのはー？　元海雄旅団の！　俺・様！！

黒渦団一等甲兵 ： お、おおっ……！

トラッハトゥーム ： お前らは「リヴァイアちゃん」って呼んでっけど、俺ともなると「リヴァイア」って呼び捨てだからなー。
だってさー、俺のほうが強いもんなー。
あああぁぁぁっ！　お、お、お、お前はッ……！

トラッハトゥーム ： す、すいませんっしたぁぁぁぁ！！！　黒渦団に頼まれて、ちょっといい気になっただけなんす！　はい！　すいません！
もちろん元海雄旅団じゃないし、リヴァイアちゃんを倒すなんて、もってのほかっす！　引っ込んで小麦挽いて寝ます！　許してッ！
で、でもよぉ……　リヴァイアちゃんの討伐を見たってのは、本当なんだよぉ。
あれは6回目の転職のとき……。船にパンを積み込むだけの簡単なお仕事に飽きた俺は、港でサボってたんだけどよぉ……。
……見ちゃったわけ。遠い沖で、たくさんの戦艦が、巨大な蛇みたいなのに向かっていって沈んでいくのをよぉ……！
それがリヴァイアちゃんだった！　俺、怖くて……いろいろピチョピチョになってよぉ！
……リヴァイアちゃんの話につられてきたってことは、お前、あいつを倒しに行くんだろ？
だとしたら、注意しろよな。あいつはやべぇ……マジやべぇからよぉ……！

黒渦団一等甲兵 ： こ、この野郎！　散々働かせといて！

ミンフィリア ： ……聞こえる？　わたしよ、ミンフィリア。蛮神「リヴァイアサン」の情報は掴めたかしら？
えっ、何……？　……リヴァイア……ちゃん？
……そ、そう、偽の情報だったのね。少しでも、あなたの役に立てばよかったのだけれど……。残念だわ。
こちらは「双胴船」の準備ができたところよ。「モラビー造船廠」で合流できるかしら？　……待ってるわね。

トラッハトゥーム ： ♪おっれさーま　きさくな　ようへいさーん♪
♪タコタン　倒した奴　マブダチでーす♪
♪おいおいおー、おいおいおー、おいおいおー、タコタン♪

サンクレッド ： ありものの資材だけで、しかも短期間に、これほどの舞台を作り上げちまうなんて……。
ナルディク＆ヴィメリー社の技術には恐れ入るな。

ユウギリ ： なんと巨大な造船所だ……。船大工たちも、みないい顔で働いている……。
彼らの顔を曇らせぬため、私もできる限りのことをしよう。

ミンフィリア ： 偽の情報は残念だったけど、悔んでいる時間さえ惜しいわ。蛮神「リヴァイアサン」の討伐に集中しましょう。

ヤ・シュトラ ： 巨大な「双胴船」を牽引し、荒海を蛮神「リヴァイアサン」に向けて突き進む……。かなりの操船技術がないと無理でしょうね。

メルウィブ ： 「双胴船」の船体は、どちらも元は軍艦だ。両艦の船長ともに、仲間の仇を討つためならと、
涙を流しながら船の提供を受け入れてくれたよ。

スティルンロナ甲曹長 ： 海そのものは御せずとも、海上を制するのが、我ら黒渦団の役目。いかなる荒波にも負けず、任務を遂行いたしますッ！

エインザル大甲将 ： おう、来たか。蛮神「リヴァイアサン」討伐の秘訣は聞けたか？　……なに、ほら吹き男のガセネタだっただと？
……ふん、まぁその様子だと、作戦前の息抜きにはなったようだな。さあ、もう一度、戦いに向けて気持ちを切り替えろ。
蛮神「リヴァイアサン」に挑む覚悟を決めたら、もう一度、俺に声をかけるんだ。

決戦、リムサ・ロミンサ沖

エインザル大甲将 ： ふむ、いい顔つきだ……さすが光の戦士か。こちらも、「双胴船」の準備が整ったぞ！
なにせ急造したものだ、外見は不格好だが気にするな。現地までは、私が軍艦で牽引する。
「双胴船」には、蛮神「リヴァイアサン」の攻撃を打ち消す「魔法障壁発動器」と、それを機能させるための、
「偏属性クリスタル」を積載してある。
奴との戦闘中も、使うことがあるかもしれん。扱いには十分に気をつけてくれ。

ミンフィリア ： サハギン族とテンパードたちの反撃が予想されます。サンクレッドとヤ・シュトラは、黒渦団の陽動作戦に協力してください。

ユウギリ ： その陽動作戦、私も行こう。敵の注意を引くなら、こちらの数は多い方がいい。

メルウィブ ： ……感謝する。では「暁」の一同は第三陸戦隊、ユウギリ殿は、第五陸戦隊に合流してくれ。
決戦の場は海上だ、十二分に気をつけてほしい。君ばかりを危険な目にあわせて、すまないと思っている。
……リムサ・ロミンサを頼んだぞ。

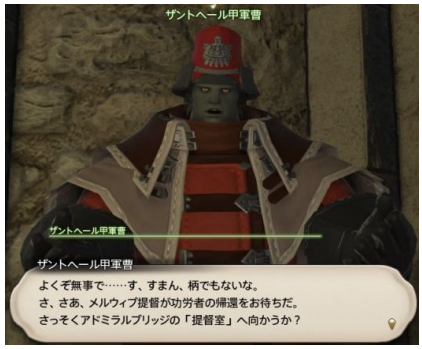
ミンフィリア ： 相手は、討伐記録が一度しかない強敵よ。どうか、気をつけて……。光の戦士に、クリスタルの加護を……！
「双胴船」には、多くの者の涙と願いがつまっている。それらに報いるためにも、なんとしても、
蛮神「リヴァイアサン」を討伐しなければならないわ。

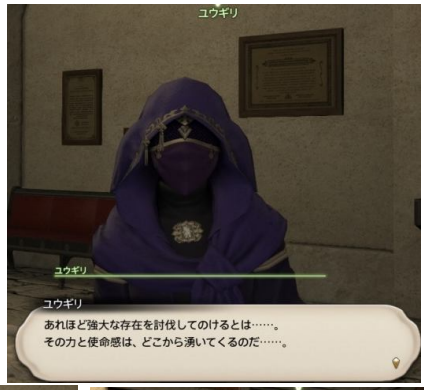
エインザル大甲将 ： お前が覚悟を決めれば、いつだって、蛮神「リヴァイアサン」のもとまで運んでやる。
……リムサ・ロミンサを頼んだぞ。

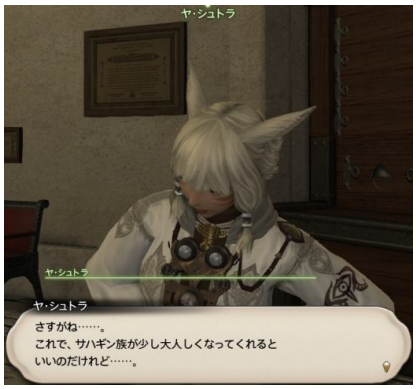
リヴァイアサン ： 我が海域を侵すか、光に穢れし者よ！
リヴァイアサン ： 清浄なる青き水を以て、穢れ清めん！
リヴァイアサン ： 我が水の力……　全てを押し流し、全てを浄化する力！
リヴァイアサン ： ぬぅ、小細工を弄したか……　なれば真なる力を解き放つのみ！
リヴァイアサン ： これが光の加護……　我が力を水泡に帰すとは……

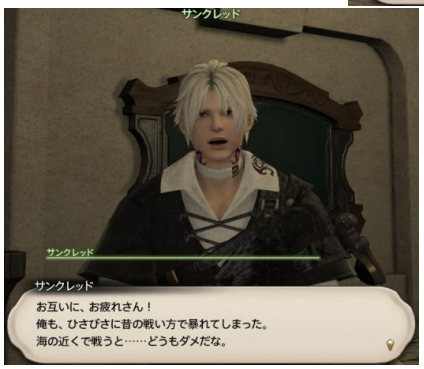
スティルンロナ甲曹長 ： 蛮神「リヴァイアサン」の討伐、ご苦労さまでしたッ！　よくぞご無事でッ！
メルウィブ提督がリムサ・ロミンサの提督室でお待ちですッ！
あなたご自身で、メルウィブ提督へ任務完了を報告し、ねぎらいの言葉をお受け取りくださいッ！

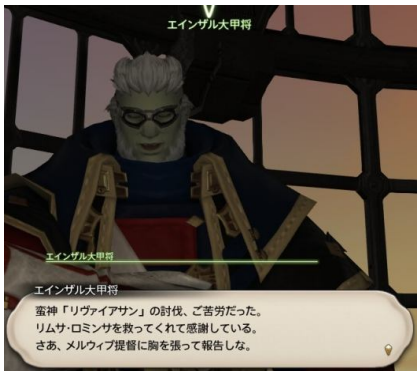
ザントヘール甲軍曹 ： よくぞ無事で……す、すまん、柄でもないな。さ、さあ、メルウィブ提督が功労者の帰還をお待ちだ。
さっそくアドミラルブリッジの「提督室」へ向かうか？











ユウギリ ： あれほど強大な存在を討伐してのけるとは……。その力と使命感は、どこから湧いてくるのだ……。

ヤ・シュトラ ： さすがね……。これで、サハギン族が少し大人しくなってくれるといいのだけれど……。

サンクレッド ： お互いに、お疲れさん！ 俺も、ひさびさに昔の戦い方で暴れてしまった。海の近くで戦うと……どうもダメだな。

ミンフィリア ： 御苦労さま、見事だったわ……。私も、蛮神「リヴァイアサン」に近づいて得たものがあるの。
あなたのおかげね……ありがとう。

エインザル大甲将 ： 蛮神「リヴァイアサン」の討伐、ご苦労だった。リムサ・ロミンサを救ってくれて感謝している。
さあ、メルウィブ提督に胸を張って報告しな。

メルウィブ ： 蛮神「リヴァイアサン」の討伐、ご苦労だった。貴公のおかげで、「大海嘯」を未然に防ぐことができたぞ。
蛮神「タイタン」に引き続き、またも助けられたな。まったく大したものだよ。冒険者にしておくのは惜しいくらいだ。
リムサ・ロミンサの代表として礼を言う。感謝するぞ。
しかし、あのような戦術があったとはな。黒渦艦隊の編成を、今一度見直すべきかもしれん。
……どこかの、「霧髭に妙に詳しい男」のおかげだな。

ユウギリ ： 蛮神といったか……。エオルゼアの民が、まさか、あのように強大な魔物と戦っているとは思いもよらなかった。
そして、それを討伐せし冒険者の力。実に見事だった……！
ドマの難民である自分に協力できることは少ないが、この地に、我らの戦闘術を伝授したいと思う。
少しばかりクセのある戦い方だが……。エオルゼアに生きる冒険者になら、きっと使いこなせるだろう。

メルウィブ ： それは、ありがたい申し出だ。この先の戦いで、きっと役に立つだろう！
それに、クセのある戦い方と言ったが、あれに近い戦闘術を持つ者たちを知っている。……そうであろう？　サンクレッド殿。

サンクレッド ： やれやれ、提督殿は何でもお見通しのようだ。
このリムサ・ロミンサには、これまで表に出てはいない「地下組織」がある。……海都の暗部で活躍している組織でね。
そこに伝わる戦い方に、君の技は似ているのさ。うまく融合できれば、新しい戦闘術になるかもしれない。

ユウギリ ： 貴殿の戦いぶり、私も共通点を感じていたのだ。なるほど、面白い戦闘術になるかもしれないな。
……しかし、直前まで見せていた技とは違うようだが？

サンクレッド ： ……それはだな。い、いろいろと理由があるんだよ、ははは。

ヤ・シュトラ ： 実はね……。サンクレッドは昔、この街でコソ泥をやっていたのよ。その時の繋がりで、ここの地下組織とも縁があるってわけ。

サンクレッド ： ま、待て、ヤ・シュトラ！

ミンフィリア ： その後、師であるルイゾワ様に拾われて、無事に更生。コソ泥から足を洗って、ウルダハで剣術を身につけたのよね？

サンクレッド ： おおお、ミンフィリアまで……。

ユウギリ ： フフフ、本性を隠していたってわけか。面白い男だな、サンクレッド殿は。

メルウィブ ： 聞けば、貴公は東方からエオルゼアに逃れてきたらしいな。今はレヴナンツトールの開拓団に加わっているとか。
リムサ・ロミンサは様々な問題を抱え、貴公らを受け入れることはできない状態だ。
しかし、物資を贈ることはできる。今回の礼も兼ねて、レヴナンツトールに支援させていただこう。

ユウギリ ： ありがとうございます、メルウィブ提督。準備に時間がかかるやもしれませんが、
きっと、我々の戦闘術を根付かせてみせましょう。

メルウィブ ： ……話とは何だ。

ヤ・シュトラ ： 今回の件……。また、あの時と同じね。
コボルド族も、サハギン族も、蛮神を召喚したのは、バイルブランド島を巡り、人と争うからよ。
……自分たちの居場所を得るために。
今回は、サハギン族が、リムサ・ロミンサの民から領土を奪おうとした……。だけど、問題の本質はどちらも同じだわ。

メルウィブ ： ああ、わかっているとも……。蛮神問題は、人が引き起こしている問題でもあろう。
お前の言うとおり、奴らは「産卵地」を得るという目的のため、まさに生きるために戦い、土地を得ようとしている。
……しかし、人もまた、生き残るために精一杯なのだ。コボルド族とサハギン族の、どちらに負けるわけにもいかん。

ヤ・シュトラ ： 生き残るために、殺し合う……。生きることが正義というなら、すべての民に正義はある。
ならば、いったい誰が悪だというのかしらね。

メルウィブ ： これを主我と言われれば、それまでかもしれん。……だが、今はそれが正義と信じるしかない。

ヤ・シュトラ ： 何が正しいのかわからないのなら、自分たちの正義を信じればいい。……いえ、信じるしかないのね。

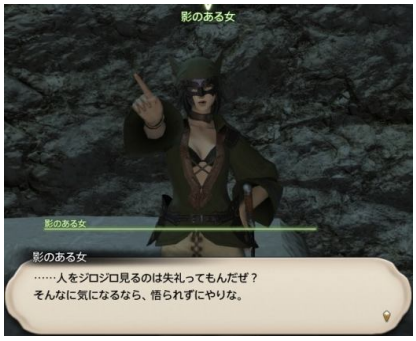
ユウギリ ： 自分たちの行いこそが正義と信じる……。人は世界中どこでも同じなのだな。
人は、自分の行いに意味を持たねば、生きていくことはできない。そういう観点では、帝国もドマも同じかもしれないな……。

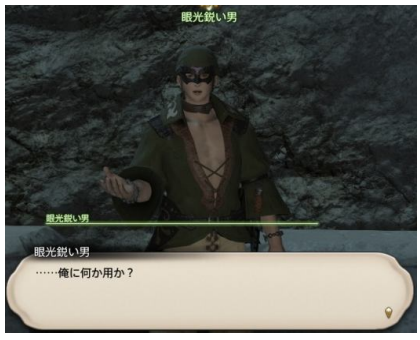
メルウィブ ： 今やエオルゼアは「混沌の渦動」……その中心だ。だからこそ人は、荒れ狂う波間の中で航路を拓くために争う。
……例え、その行いが他者の正義とぶつかったとしても、な。
自分が生きていくための行い。自分の居場所をみつけるための争い。自分を存在させるための正義……か。

海都の地下組織

ザントヘール甲軍曹 ： 地下組織の件……話は聞いたぞ。メルウィブ提督から、紹介状を預かっている。
これを、下甲板層の南の広場にいるヒューラン族の男に渡せ。件の組織に渡りをつけてくれるはずだ。
……ここからは、ちょっとした忠告と思って聞いてほしい。奴らは、リムサ・ロミンサの裏に生きる者たちだ。
それゆえ、海賊以上に独立独歩の気風が強い。メルウィブ提督の紹介状があるからといって、
事が上手く運ぶとは限らない、ということだ。
彼らの結束は、鉄よりも固い。誰か組織に属す者の仲介でもあれば、話は簡単なのだがな。
さあ、この封書を受け取ってくれ。南の広場にいる「眼光鋭い男」に渡せば、話が通るはずだ。

影のある女 ： ……人をジロジロ見るのは失礼ってもんだぜ？ そんなに気になるなら、悟られずにやりな。





眼光鋭い男 ： ……俺に何か用か？
……なるほどね。わざわざ俺たちを呼び出したのは、そういうことかい。
サンクレッドさんも、水臭いぜ。たまには顔を出してくれりゃいいのによ。
……その気迫、只者じゃないな。あんたが、東方の民か？

ユウギリ ： ユウギリと言う。……よろしく頼む。
「地下組織」というからには、汚れ仕事を担う隠密を想像していたのだが……。案外に鷹揚なのだな。

眼光鋭い男 ： まぁ、俺たちは「義賊」で売ってるからね。ここは海賊どもが牛耳る街だぜ？
汚れ仕事こそ、表の奴らにやらせておけばいい。
裏の俺たちには、俺たちにしかできない仕事がある。……そういうことさ。

ユウギリ ： なるほど……我らの戦闘術は、影と共に生きる者たちのために編み出されたもの。
その過程は同じなのかも知れぬな。

眼光鋭い男 ： わかったんなら、そろそろ懐の得物をしまってくれよ？　……ユウギリとか言ったな、今日から俺たちは仲間だ。
歓迎するぜ……！

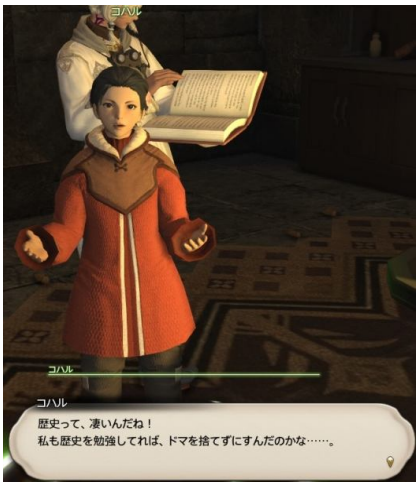
ユウギリ ： ◆◆◆殿……。私は、彼らと行動をともにし、この者たちの流儀を学んでみるつもりだ。
しばらくは、リムサ・ロミンサで軒先を借りるとしよう。ドマの民には、後ほど私から連絡を入れておくゆえ、
心配する必要はない。
貴殿には、何から何まで世話になった。感謝の言葉も無い。
いつか、我が東方の戦闘術を、教え広める時が来るやもしれない。その時は、貴殿にその技を伝えることで礼とさせてくれ。

混沌の渦動

ユウギリ ： 我らの戦闘術と、地下組織の者らの技……　その融合が成し得るかを見極めるつもりだ。
それには、しばらくの時が必要となる。
……思えば、祖国ドマを逃れ、ずいぶんと遠くまで来たものだ。貴殿たちには、本当に世話になった。
「暁」のミンフィリア殿にも、感謝の意を伝えてほしい。また会おう、勇敢な冒険者……。いや、光の戦士よ！

眼光鋭い男 ： サンクレッドさんが組織を離れて、ずいぶん経つが……。また昔みたいに、一緒に仕事をしたいもんだぜ。

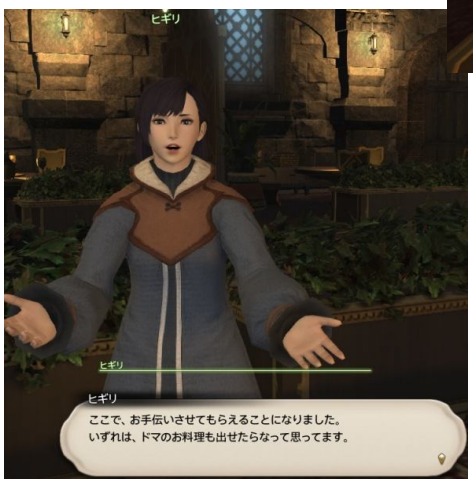
影のある女 ： 東方の戦闘術……。こいつは見ものだな。

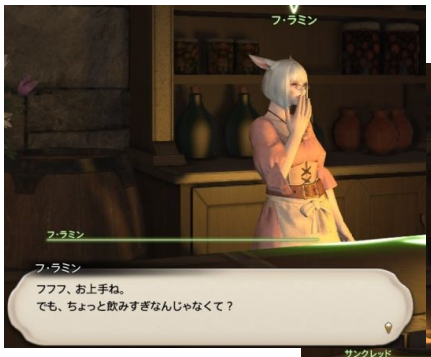


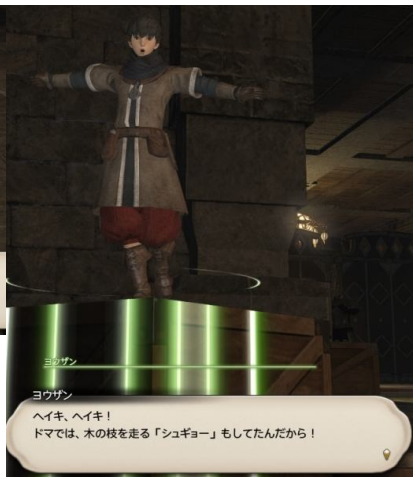
コハル ： 歴史って、凄いんだね！　私も歴史を勉強してれば、ドマを捨てずにすんだのかな……。

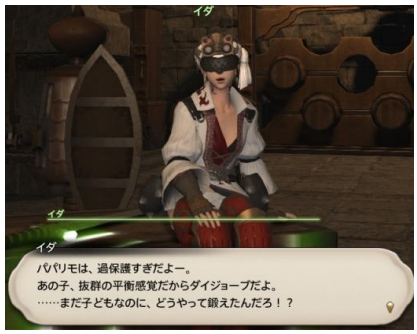
ヤ・シュトラ ： 問題の解決法は、歴史の中に隠れていることが多いもの。時には過去を探ることも大切よ。

タタル ： ドマのみなさん、いらっしゃいませでっす。石の家は、いつでも歓迎するでっす。
◇◇◇さんも、おかえりなさいでっす。わたし、本格的に採掘師のベンキョウを始めようと思いまっす。









ホウザン ： 「石の家」という名のとおり、見事な石造りをしているな。しかし、ほかの建物も石造りのようだったが……
すべてが「石の家」なのか？

クルトゥネ ： 冒険者というのは、権力に屈することなく、己の意思で己の生きる道を切り開く存在なんです。

ドウワレ ： ドマでいうところの、「士道」のようなものだろうか。……だが、仕えるべき主なくして、どうして正しき道が解るのだ？

ヒギリ ： ここで、お手伝いさせてもらえることになりました。いずれは、ドマのお料理も出せたらなって思ってます。

サンクレッド ： 実は15年前、ウルダハに仕事で行ったとき、ラミンさんを見かけたんですよ。あまりの美しさに、目が釘付けでした。
あの頃は、俺も未熟だったし、こうやってラミンさんとお近づきになる日がくるなんて、想像もしてなかったなぁ、はっはっはっ。

フ・ラミン ： フフフ、お上手ね。でも、ちょっと飲みすぎなんじゃなくて？

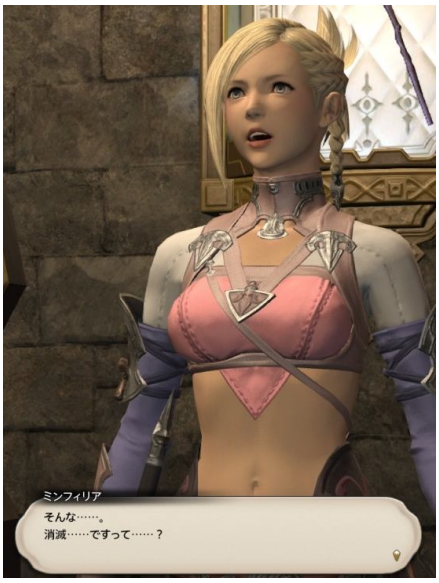
パパリモ ： おい、君、危ないぞ！　降りなさい！

ヨウザン ： ヘイキ、ヘイキ！　ドマでは、木の枝を走る「シュギョー」もしてたんだから！

イダ ： パパリモは、過保護すぎだよー。あの子、抜群の平衡感覚だからダイジョーブだよ。
……まだ子どもなのに、どうやって鍛えたんだろ！？

ホーリー・ボルダー ： 開拓団の有志を募って、戦闘の稽古をすることになりましてね。指南役として、彼らが使いやすい装備品を
見繕っているんですよ。

ミンフィリア ： 少し、いいかしら。……あなたに、聞いておいてほしいことがあるの。
リムサ・ロミンサに行ってから、ずっと考えていたことがあるわ。
蛮神「リヴァイアサン」が召喚される際、あの長老と思われるサハギン族は「超える力」を行使した。
そして、「超える力」を受け入れたことで、一時的にとはいえ、確かに「不死」となった……。
古い伝承には、霊災の度に転生して生まれ変わり、困難に立ち向かう魂があるというわ。
私は、この伝承にある「転生する魂」こそが、「超える力」の正体なんじゃないか……　そんな風に考えています。
今回の一件で、ますますその想いは強くなったわ。
次々と肉体を入れ替える、魂だけの存在……　まるで、任意に転生を繰り返しているようなものだもの。
この伝承が真実とするならば、「超える力」の真実にも、辿り着けるかもしれない……。
「超える力」の能力は、言葉、心、時間などの壁を超え、相手を「視る」ことができるというもの。
これまで、あなたが体験したように、立ち塞がる「精神の壁」を超えることができる能力ね。
では、伝承による「転生」とは何なのかしら？　……例えばそれが、今回サハギン族がみせたような、
「肉体」への転移を指していたとしたら。
つまり「超える力」の最大の能力が、「肉体の壁」を超え、魂だけの存在になることなのだとしたら……。
アシエン・エリディブスが言っていたとおり、「不死」の存在となるかもしれない。
でも、アシエンと同じ「不滅なる者」となったはずのサハギン族は、蛮神「リヴァイアサン」が顕現する際の
エーテル消耗によって、蛮神に吸収されてしまった……。
……そう、不滅なる者は、決して「不死」ではない。ここに、アシエン消滅の手掛かりがあるはずよ。
「超える力」の能力と、アシエン消滅の方法……。わたしは、引き続きウリエンジェさんとこの件を追ってみます。
あら、ウリエンジェさん。ちょうどいいところに……。……どうかしたの？



ウリエンジェ ： 大変です、ミンフィリア。
連絡が途絶えたバルデシオン委員会をシャーレアン本国を経由して、調査していたのですが……。

ミンフィリア ： ……何があったの？

ウリエンジェ ： 委員会の本部があるバル島が、海洋から完全に消滅しているとの報告がありました……。

ミンフィリア ： そんな……。消滅……ですって……？

ウリエンジェ ： シャーレアン本国の記録によると、大規模な魔法波が観測されたようです……。
おそらく……。古代魔法「アルテマ」級の魔法攻撃を受け、瞬時に消滅したのではないかと……。

ミンフィリア ： いったい、何が起きたというの……。

ロロリト ： では、本日の定例会合は終わるとしよう。皆、ご苦労だった。

テレジ・アデレジの侍従 ： 旦那様に指示された準備は整いました。
しかし、このようなこと……。いったい何をするおつもりなのです？

テレジ・アデレジ ： ……戦争だよ。